小島清名誉教授自作年譜

一　生い立ち

大正九（一九二〇）年。私の出生と少年期は余りにもミゼラブルであったので、多くを語りたくない。五月二二日、瀬見井民三郎、ゑつの、男四人・女三人の末子として、名古屋市中区流町二一に生まれた。父は名古屋近傍の祖父江村の水飲百姓の三男で、名古屋へ出てきて、いくつかの小商売を試みたが成功せず、子沢山で大変な貧窮状態にあった。

昭和二年四月。波寄尋常小学校へ入学、同八年三月卒業。世界恐慌と日本経済の混乱のあふりをうけて、我が家は極貧、露店商に出かける母と荷物を、リヤカーに乗せて、送り迎えする毎日であった。私は小学校を出たらすぐ小僧に行けといわれていた。小学校の恩師丹羽哲夫先生が、成績の良い私をあわれんで、せめてすぐ役に立つ商業学校へ行くよう、両親兄姉を説得して下さった。こうして、商—商—商という進学コースをたどることになった。私の〝毛並〟は甚だお粗末であったわけだ。

昭和八年四月。愛知県商業学校へ入学、同一三年三月卒業。当時の校長は今村直人先生で、九十歳を過ぎた今日も矍鑠と活躍されている。私は入試も一番であったが、五年間ずっと首席を続けた。担当教諭岡部淳一先生のお世話で、名古屋市中区榎町（大須の裏）に住んでいた小島鉄次郎、まさの家に、昭和一三年一月、養子に入った。小島の祖父（芸名杵屋三太郎）は、徳川慶喜候に随って江戸落ちした旗本で、長唄の家元として有名であった。父は能管を楽しみ、母は長唄を嗜んでいた。伯母は、ロシア文学の中村白葉氏に嫁いでいた。つまり名家ではあったらしい。だが帝国水産に務める平サラリーマンで、経済的には豊かではなく、私が東京商大へ入学してから、その学費に両親は苦労したらしい。

昭和一三年四月。名古屋高等商業学校に無試験入学、同一六年三月卒業。渡辺龍聖校長の創設した当時の名高商は、國松豊、小原亀太郎、高島佐一郎、赤松要、宮田喜代蔵、酒井正三郎、藻利重隆、北川一雄など錚々たる教授連が肩をならべていた黄金時代にあった。商業出の私は、宮田先生の講義を聞き、ゼミ指導を受けた。中山伊知郎先生の『純粋経済学』が世に問われた頃で、それが検討の対象となった。赤松先生は中学出を担当されており、昭和一四年四月に東京商大へ栄転されたので、私

は名高商ではついにお教えを得ることができなかった。すでに満州事件、支那事変と進展していたわけで、勉強には熱中できなかった。父の勧めで謡曲の手ほどきをうけ、それを楽しんだ。

二　終戦前後

昭和一六年四月。東京商科大学々部に入学、同一八年九月繰上げ卒業。

昭和一八年十月より二年間、東京商科大学特別研究生。

昭和二〇年一〇月。東京産業大学助手を命ぜられる。

学者にも〝運〟というものがあるし、それが必要であるらしい。父は私が名高商を卒業して、名古屋で就職することを希望していたらしいが、東京商大学部への入試に成功した。名高商の宮田先生の紹介で赤松要先生のゼミへ入れて頂いた。私の新しい運命が開かれた。いくつかの幸運に恵まれた。

赤松先生は、「世界経済の異質化と同質化」という基本構想を、技術進歩が世界経済の発展にいかに貢献したかという観点から実証し、拡充されようとしていた。先生は暇がないから、それを私の卒論のテーマにしてやってみよとの下命をうけた。私は一年余、図書館に通い、その調査に没頭した。

そのうちに事局は大東亜戦争に発展し、昭和一七年一二月、赤松先生は南方総軍軍政総監部に属する調査団の長として、シンガポールに赴かれた。私も同行を熱望したのだが、国際経済学の研究に専念せよと慰留された。先生の留守中、山田雄三、阿部源一両教授の指導をうけることになった。そして、先の調査が、赤松先生との共著の形で、『世界経済と技術』として昭和一八年六月、商工行政社から公刊された。これが私の実質上の卒業論文であり、私の最初の著書となった。卒論としては別に「保護貿易理論の研究」(マノイレスコ、シュラーの学説研究が中心)を、後に提出した。

昭和一八年三月。財団法人郷男爵記念会が大規模な懸賞論文を募った。その委員であった高瀬荘太郎学長の勧めに従い、右の『世界経済と技術』の調査を基礎に、それを増補拡充したものを『世界経済新秩序と日本経済の将来』という公募タイトルの下に提出した。幸にも一等に入選し(昭和一八年九月一五日)、一万五千円をもらった。まったくラッキーというの外はない。この賞金はかなり巨額なものであり、その後高円寺の家(借地だが)の購入費になり、それを売って現在の小金井宅の地所が買えた。そういう幸運なめぐりあいになったのである。

赤松先生は、昭和一八年八月から一二月まで一時帰国されたが、結局、終戦後の二一年八月に無事帰還されるまで留守であった。この間、先生の学位論文『経済新秩序の形成原理』をパスさせるべく大熊信行博士と努力したことや、銃撃も受けた国立の町で、御家族と懸命に生きてきたことを思い出す。

もう一つの運命の岐路があった。本来、昭和一九年三月に学部を卒業する予定であったが、大東亜戦争の熾烈化、学徒動員、そして一八年九月に繰上げ卒業という、急迫した情勢になった。この時、全国で理工系四〇〇名、社会科学系一〇〇名を残すという特別研究生制度が発足したのである。磯野修、鈴木秀勇、

飯野利夫、小山路男らの諸兄とともに、大学で研究を続けうることになった。若しこれなかりせば、私は今日まで生命を全うしえなかったであろう。私は昭和一九年二月に甲種合格で名古屋で入隊することになっていた。まことに紙一重の差であった。

こうして、昭和二〇年八月一五日の終戦を迎え、一〇月から東京産業大学助手に任ぜられた。特別研究生時代の二年間の成果が、赤松要・山田雄三両先生の好意により、『自由貿易理論の研究』として、昭和二三年一月、名古屋の黎明書房より公刊された。

昭和二二年六月二二日。瓜谷圭子と結婚。板垣与一先生のお世話で、その夫人の妹と結ばれたわけである。大連の豪商瓜谷長造の三女であるが、敗戦、引揚げですっかり斜陽族になっていた。そのことが反ってお互によかったのかもしれない。高円寺に落ちついた。赤松先生が次の和歌をはなむけに下さった。

ここまでは　つきて来たれど　若き友
わが体系を　乗り越えゆけや

昭和二四年七月。東京商科大学助教授に補さる。この頃から「貿易論」の講義とゼミをもつことになった。

昭和二五年五月。『外国貿易』を春秋社より出版す。「現代商学全集」の一巻として、テキストブック用に書かれたものである。その後一九五七年、一九六六年、一九七三年、一九八一年と四回にわたり改訂し、私の研究成果を次々に織り込んできた。今日までなお新鮮な生命を保っている。

昭和二五年八月。『国際経済論』を新紀元社より出版。外務省（大来佐武郎氏とのつきあいがこの頃から始まった）、ついで経済安定本部での戦後世界経済見通し作業、赤松先生の主催された国際貿易憲章の研究、三六〇円レートの設定問題、ドル不足問題など、戦後世界経済再建の理想と現実を追求してきた諸労作の集大成である。

昭和二五年一〇月。*The Annals of the Hitotsubashi Academy* 第一号を発刊。一橋大学はもともと国際的大学たることを誇っていたのであるが、その活動の重要な一環として英文紀要を発刊することになった。中山伊知郎学長（当時）の命で、費用はいくらかかってもよいから、世界に通用する一流のものを出せとのことであった。私と飯野利夫氏とが編集長として、かなり長く努力した。今日では、*Hitotsubashi Journal of Economics* など、いくつかに分かれ、発展していることは喜ばしい。その創刊事業であった。

昭和二五年一一月。第二回国際経済学会大阪市立大学大会において、「リカアドオの国際均衡論」なる報告をした。これが私の学界へのデビューであった。

昭和二七年一二月。『国際経済理論の研究』を東洋経済新報社から出版。戦争直後吸収した海外の国際経済理論研究の集大成である。リカアドオ、J・S・ミル、グレーアムらの古典派貿易論と、為替市場の安定性論、外国貿易乗数論の検討にあてられている。

商大入学の二十一歳から、この本を書き上げた三十二歳までが、私の研究生活の第一期であった。そして国際経済学界への

デビューを果たした。いくつかの幸運に恵まれた。戦後とくに脚光をあびるようになった国際経済学の担当を命ぜられたことも、私のもう一つの幸運であった。

三　英・欧・米・加留学

(昭和二七年七月―三〇年一月) 昭和二七年七月一八日神戸港出帆、同三〇年一月二六日横浜港へ帰国するまでの、二年半の外遊に出発。外国留学は永い夢であった。当時、東大でアメリカ・セミナーが催され、デイビス、エリス両教授らの教えをうけ、私の留学熱は高まっていた。戦前から未留学の先輩が沢山待機されていたので文部省の金で出かけることは到底望みうべくもなかった。都留重人経済研究所長(当時)のすすめもあってロックフェラー奨学金に応募したが、大先輩の木村健康東大教授が行かれることになった。私はどうも、すべてのことに、第一回は失敗し第二回に成功するようだ。勇を鼓しブリティッシュ・カウンシルの公募試験に応じ成功した。面白いことにロックフェラー財団からも奨学金をくれることが殆んど同時期に通知された。結局、最初にイギリスへ一年行き、その後アメリカへ回るよう交渉し、承認された。この巡り方の選択は非常によかったと今になっても思う。耐乏生活のイギリスで政治経済学の真価をみきわめた上、アメリカに渡ったわけであるが、もし逆に、物質文明に酔い技術論に堕したアメリカ経済学に最初に接したならば、それに毒されることになったであろうし、貧乏なイギリスへ足をのばす気になれなかったかもしれない。とまれ、戦後早い時期、おそらく一橋で最初の留学であったわけである。その思い出はつきないのであるが、旅程だけを簡単に記しておこう。

(1) 一九五二・七・一八。神戸出港、香港に十日間滞在(当事時事通信勤務だった石川滋氏に会う)、P&Oの大型船に乗りかえ、合計四十余日かけてスエズ運河経由、ロンドンへ九月二日に着く。

(2) 一九五二・九―五三・七・一一。――イギリス留学――。ヨークシャーの Leeds 大学にて A. J. Brown 教授に師事。師の「貿易結合度」分析を日本に持帰ることになる。休暇を利用し各地を旅行。Harrod, MacDougall, J. E. Meade, G. C. Allen, Schackle 教授等に会う。ヒックス教授のイノギュラル・レクチュア (*Oxford Economic Papers*, June 1953 に発表) にハロッド卿と一緒に列しえた。これが私に強烈な印象を与えた。

(3) 一九五三・七―九・二九。ヨーロッパ八日間のコーチ・ツア (London-Brussels-Luxemburg-Bad Schwalbach-Heidelberg-Freiburg-Liechtenstein-Zurich-Lucerne-Troyes-Paris) の後、四十日間パリ滞在、GATT、ILO、ECEを訪ね研究。次いでジュネーブに約一カ月滞在、OEECを訪ね研究。次いでジュネーブに約一カ月滞在、GATT、ILO、ECEを訪ねこれら国際機関の活動を調査。イタリア、スイス、ドイツ、オランダ旅行を経てロンドンへ九月二一日に帰る。ミュルダール、レプケ教授等に会う。ケムブリッヂとリーズを再訪問。

(4) 一九五三・一〇・一。サザンプトンから十日間かけて大西

洋を船で渡りニューヨークに着く。

(5)一九五三・一〇―一二月。妻圭子、一年三カ月ぶりにボストンへ来り、リユニオン。ハーバード大学経済学部で、ハーバラー教授の指導をうく。Leontief, Williams, Samuelson, Tinbergen 諸教授の講義ないし講演を聞く機会があった。

(6)一九五四年一―六月。プリンストン大学でヴァイナー教授の指導を受く。その助言でアメリカ、カナダの数ヶ所を短期間づつ訪れることになった。

(7)一九五四年七、八月。ワシントンのブルッキングス研究所を本拠に、政府、国際機関（IMF、世銀）の活動を研究。ジョンズ・ホプキンス大学にマクラップ教授を訪う。

(8)一九五四年九月―一〇月中旬。トロント大学でエリオット教授の指導を受く。

(9)一九五四年一〇月中旬―一一月中旬。モントリオール大学でマーシュ教授に師事。当時チューターであったM・ケンプ氏に会う。

(10)一九五四年一一月中旬―一二月。シカゴ大学でメッツラー、ハーバージャー教授らと交る。

(11)帰国の旅。シカゴから汽車でサンスランシスコに出、バークレーとスタンフォード大学を訪問。エリス、レテイシュ、シトウスキー諸教授らと会う。遊学中の木村元一教授の好遇をうけた。プレジデント・ラインに乗船、途中ホノルルに半日寄港し、一九五五年一月二六日横浜に帰国（二週間の航海）。

留学中、リカアドオ、ミル、グレーアム、マーシャル等の国際均衡の純粋分析を検討、幾何学的解明を深めた。これは一つの成果であった。だが同時に、日本経済と貿易の研究を進め、日本独自の政策理論を樹立し、世界にチャレンジすべきであると痛感した。これがその後の私の研究を左右することになった。けだしイギリス、ヨーロッパ、アメリカ、カナダの各国経済の分析は、いくらわれわれ日本人がやろうとしても、結局かれらには太刀打ちできない。またかれらは西欧経済の実態に基礎をおいた経済理論をユニバーサルなものと見、最善と信じこんでいるからだ。それが私にはぴったりとこない。日本さらに後進国の理論があるべきだと疑われたのである。

四　三十代

昭和二八年一〇月。私の外遊中だが、東京産業大学から一橋大学に編成替えされ、席の関係で、私は商学部に配属された。経済学部へ移ったのは、赤松先生の退官が間近になった昭和三三年四月からである。

昭和三〇年八月。高円寺より、小金井市前原町の新居に移る。

昭和三〇年一〇月。外遊中没頭していた〝国際貿易の純粋分析〟に関するいくつかの論文を、帰国後発表した。その代表が、一橋大学創立八十周年記念論集下巻に書いた「経済成長と国際貿易」である。〝国際貿易の純粋分析〟は、今日に至るもなお一書にまとめえないで、苦しんでいるテーマである。

昭和三一年九月。『交易条件』を勁草書房より出版。帰国後、日本の経済発展と貿易の役割に関する実証、理論、政策の三側

面からせまる研究に集中することになった。『交易条件』がその第一の成果であり、以下に挙げるようないくつかの著書になり、学位論文に結集された。この間、経済研究所の篠原三代平教授らとの激しい論争を斗わせることになった。

昭和三三年一月。『赤松要博士還暦記念論集　経済政策と国際貿易』を編集し、春秋社より出版。赤松先生は欣喜され、次の句をものされた。

若きより　論争しつつ　老いけりや
還暦論集にも　われらたたかえり

昭和三三年九月。『日本貿易と経済発展』を国元書房より公刊。

昭和三五年四月。一橋大学教授に昇任。

同。『論争・経済成長と日本貿易』を編集し、弘文堂より出版。

昭和三五年一二月。エコノミック・ジャーナルに、Capital Accumulation and the Course of Industrialization なる論文を発表。ハロッド卿の配慮に負うところ多いが、一流外国専門誌へのデビュー作として、感銘深いものがある。

昭和三七年一月。先の『日本貿易と経済発展』により、経済学博士（旧制）を授与さる。

昭和三七年四月。『世界経済と日本貿易』を勁草書房より公刊。ここまでが私の研究の第二期であったといえよう。

五　開発途上国問題と経済統合論

一九五五年一月に外遊から帰ってから、しばらくの間、国内に閉ぢこもったわけだが、一九六〇年代に入り、海外出張が頻繁となり、海外との共同研究を通じ、研究分野は手広くなっていった。

昭和三六年一〇月。「日本経済の国際的地位と役割」に関するCED（米・経済発展委員会）と経済同友会のサンフランシスコ会議に出席。これが後の太平洋経済圏問題へのきっかけになった。この会議は東京と交互に開かれたので、昭和三七年六月に、再度サンフランシスコに出かけた。

昭和三六年一二月―三七年二月。「東南アジア経済の将来構造」に関するカラチ会議に、藤井茂、北川一雄、喜多村浩氏などと一緒に出席。ハロッド卿が全セッションをリードした。私は「L―N型からL―C型への世界経済構造変動」をここで始めて発表した。会議のあと、インド、パキスタン、ビルマ、タイ、マラヤ連邦、シンガポール、インドネシア、フィリピンおよび台湾の各地を、始めて視察、私の「肥料援助構想」を説いて回った。開発途上国問題に関心を深めるきっかけとなった。アジア経済研究所にてアジア開発途上国問題の調査にたづさわり、次の編著および論文を発表した。

昭和三六年三月。編著『アジア第一次商品の基本問題』。

昭和三七年二月。編著『アジア第一次商品貿易』。

昭和三七年一一月。編著『東南アジア経済の将来構造』。

"The Pattern of Triangular Trade among the U. S. A., Japan, and Southeast Asia," *Developing Economies*, Prelr-

minary Issue, No. 1, March-August 1962. この論文はロンドン・エコノミスト誌など、海外で注目された。

昭和三七年一一月。『EECの経済学』を日本評論社より出版。その増補新版が同四二年四月に出された。当時進展していたヨーロッパ経済統合の実証的・理論的研究であった。「合意的国際分業論」を打出した。それが、次のハロッド卿記念論文になった。

"Towards a Theory of Agreed Specialization: The Economics of Integration," in *Induction, Growth and Trade*, Essays in honour of Sir Roy Harrod, Oxford, 1970.

昭和三七年一一月—三八年一月。中南米十一ヶ国を、フォード財団のトラベル・グラントを得て視察。中南米で進行中の開発途上国経済統合を調査するのが主目的であった。帰国後「高原経済学」と中南米を特徴づけた。

昭和三八年三—四月。外務省の委嘱で、オーストラリアとニュージーランドへ講演の旅に出た。これがきっかけとなり、日豪経済関係の研究にひき入れられることになった。その印象記「小人口国の経済学」(経済評論、一九六三年七月号)が、後にクローカア教授によって英訳され、オーストラリアの *Economic Record* 誌(一九六四年三月号)に発表され、大きな反響を生んだ。オーストラリア経済の発展方向に対し一つの重大な示唆を与えた。

昭和三八年六—九月。この翌年(一九六四)から始まったUNCTAD(国連貿易開発会議)の準備のため、D_1(ディレクター)の資格でニューヨーク本部に勤め、事務局ペーパーを作った。いわゆるプレビッシュ報告の中に、私のアイディアが一部とり入れられることになった。一緒に、また前後して、逸見謙三、宮崎勇、金森久雄、海老原武邦氏などがUNCTAD準備に貢献したし、事務局内に佐藤和夫、河村鎰男氏などがいた。この勤務が、開発途上国問題への私の関心を決定的なものにした。国連ビルの近くのアパートに妻と仮寓し、よく働いた。

昭和三九年五月。『低開発国の貿易』を国元書房から出版。国連勤務中の成果を中心にし、それまでのものも加えた、開発途上国問題研究の集大成である。

昭和三九年五—六月。マクラップ教授の主催する「国際通貨問題」に関するベラジオ(イタリー)セミナーに参加、「レント・カレンシー」案を提唱。帰途ジュネーブを再訪。

昭和三九年七—八月。オーストラリア国立大学での「日本の対外関係」セミナーに参加。

昭和三九年から約一年半、バラッサ教授の共同研究に参加。その成果が後に公刊された。"Trade Arrangements Among Industrial Countries: Effects on Japan," in Bela Balassa and Associates, *Studies in Trade Liberalization. Problems and Prospects for the Industrial Countries*, The Johns Hopkins Press, 1967. この共同研究中、欧州共同体の発展がすばらしいのにひきかえ、環太平洋地域の経済発展はどうなるのか、置き去りにされるのではあるまいか、という危機感をいだいた。これが、以下に述べる、太平洋経済圏構想の発端とな

ったのである。

六　太平洋経済圏構想

太平洋経済圏（Pacific Economic Community）作りへ向けての実践的活動が、四十歳央ばからの私の一生の課題となった。処女作『世界経済と技術』と無関係でないし、その後の一連の視察、とくに経済統合の研究と密着している。二十一世紀に向けて、私の提案が開花・実現することを、秘かに待望している。

昭和三九年二月。ハワイの東西センター主催の「太平洋先進国の貿易援助政策」会議に出席。ここで、「太平洋自由貿易地域」提案を着想。豪州国立大学のコーデン教授とはじめて会い、ワイキキの浜で談笑。

納谷誠二君とも初会。彼の助けで、ゴルフセットを買い求めた。帰国後近くにICUコースがオープンしたので、それに入り、ゴルフを始めた。私の生活態度の転機でもあった。ゴルフは今日まで、余り上達しなかったが、健康維持に役立っている。

昭和四〇年一一月。大来佐武郎氏が、日本経済研究センターで、「低開発国の貿易と開発」なる国際会議を開催。ハリー・ジョンソン、ヌルール・イスラム、ジャクディシュ・バグワティなどが招かれた。ここで「太平洋共同市場」なる私の構想が始めて出された（大来佐武郎編『低開発国の貿易と開発』日本経済新聞社、一九六六・三、参照）。

昭和四二年三―四月。私のパシフィック・コミュニティ提案に、当時の外務大臣三木武夫氏が注目され、構想を推進するために、学者グループの国際会議を開催できないものかをサウンドアウトしてこいとの命をうけた。米、加、英、豪、ニュージーランドを訪問、キー・バーソンたちと要談した。

昭和四三年一月。私が組織委員長となって、「太平洋貿易開発会議」PAFTAD―Pacific Trade and Development Conference を、日本経済研究センターで開催した。私は、一回限りの会議だと予期していたのに、参加者の関心と熱意は強く、今日まで存続・発展するユニークな、一種の学会になった。私はその International Steering Committee のチェアマンを第一三回大会までつとめ（第一四回より大来佐武郎氏にバトン・タッチした）、一回もかかさず出席し、時に良いペーパーを発表した。

昭和四三年五月九日。父鉄次郎死去。名古屋にもどり、少し気楽な生活をせよと勧めていた父だが、私の活躍に満足して、名古屋で昇天した。

昭和四二年八月一日―同四四年六月一六日。一橋大学経済学部長をつとめる。時恰かも学園紛争、本館封鎖時であり、困難をきわめた。ついに病を得、二年の任期をわずか残して辞任した。私の病気というのは、学位論文執筆時の疲労から、左眼中心性網膜炎にかかったのが、再発し、高血圧になったことである。この病気が、さいきん右眼にも現れてきて、私の苦悩の種となっている。学部長在職中、二階堂副包教授を迎えることができたのは、私の貢献であったと言えよう。

昭和四四年五月。『太平洋経済圏と日本』を国元書房より公

刊。学部長職にある間も太平洋経済圏問題の研究と会議活動は続けられたわけで、序文の最後に次のように記している。

「本書は世界貿易通貨体制の激変のなかにおいて、しかもわたくしが一橋大学経済学部長の重責をになってスチューデント・パワー問題と生命をかけて取り組んできたさ中に、生み出されたものとして、わたくしにとってもひとしお感慨の深いものがある。本書を世に送り出すことができたについては、わたくしの学問を託することになるであろう一橋大学山沢逸平講師による……貴重な貢献に負うところが多い。」

なおこの英語版が *Japan and a Pacific Free Trade Area*, Macmillan, 1971 (May) として世界に向けて公刊されたことは、光栄であり幸運であった。

政府関係の活動は四十代に集中した。発令されたもの（発令されなかったものも多いが）だけを次にまとめておく。

昭和二五年十月。経済安定本部国民所得調査連絡協議会委員
昭和三一年七月—三二年三月。小樽商科大学講師に併任
昭和三七年二月。内閣　統計審議会専門委員
昭和三七年三月。通産省産業構造調査会専門委員
昭和三八年七月。内閣総理大臣　経済審議会専門委員
昭和三九年六月。内閣総理大臣　経済審議会臨時委員
昭和三九年一二月（一年）。通産大臣　産業構造審議会委員
昭和四一年四月—四二年九月。内閣総理大臣　資源調査会専門委員
昭和四二年三月—八月。外務大臣　外務事務官（国際資料部）に併任
昭和四二年三月（一年）。通産大臣　産業構造審議会委員
昭和四四年七月。内閣総理大臣　経済審議会臨時委員
昭和四五年一二月（一年）。通産大臣　産業構造審議会臨時委員
昭和四六年四月—一〇月。外務大臣　外務公務員採用上級試験委員
昭和四七年四月—一〇月。同右。

日本国際問題研究所で太平洋経済圏構想の研究を進めていた。次の三著を同研究所から出版した。

大来佐武郎・小島清編『南北貿易の再編成——太平洋先進諸国と東南アジア経済——』一九七一年九月。
同『アジア太平洋経済圏』一九七三年一〇月。
小島清編『東アジア経済と日本』一九七五年一〇月。

また、『一九八〇年代日本外交の針路』日本国際問題研究所、一九八〇年九月、に集録された拙稿「アジア太平洋地域の経済協力」（英文も）は、太平洋経済圏についてのいちばんまとまった労作である。

昭和五〇年一〇月。『世界経済新秩序と日本』を日本経済新聞社より公刊。世界通商・通貨体制、開発途上国問題、産業構造調整、海外直接投資、それに太平洋経済圏といった、日本をめぐる国際経済問題についての政策論である。幸いにもこの英語版が公刊された。*Japan and A New World Economic Order*, Croom Helm, London, 1977 (Tuttle, Tokyo から普及版も出された)。

昭和五五年九月。私の還暦を記念して『太平洋経済圏の生成』を、韮沢嘉雄氏の好意により世界経済研究協会より自費出版。第一〇回までの太平洋貿易開発会議の活動と成果を伝えるとともに、東南アジア、韓国、オセアニア、中南米、それにソ連への視察旅行の印象記をとりまとめている。「視察旅行と国際会議討論が私の構想、政策論の窓であった」と、序文を結んでいる。

昭和五五年九月。豪国立大学総長ジョン・クロフォード卿主催「パシフィック・コミュニテイ・セミナー」にオブザーバーとして出席。故大平首相の「環太平洋連帯構想報告」をうけて開催されたものだが、われわれ学界の太平洋貿易開発会議（PAFTAD）とビジネスの太平洋経済委員会（PBEC）の外に、非公式ではあるが環太平洋十一カ国政府（先進五カ国、アセアン五カ国、韓国）が関与する形の「太平洋経済協力会議」PECC: Pacific Economic Cooperation Conference を継続的にもつことになった。政府の参加によって構想の具体化が促進されると期待される。第二回PECCは、一九八二年六月、バンコックで、第三回は一九八四年一一月、インドネシアのバリ島で開かれた。アセアンのリーダーたるインドネシアが前向きの姿勢を打出した点に、大きな意義が認められる。

パシフィック・コミュニティ作りと平行して、それと直接・間接に関連するいくつかの海外活動に忙殺された。

昭和四五年三―四月。ADB（アジア開発銀行）のラ・ミント委員会に参加。成果は、ADB, *Southeast Asia's Economy in the 1970s*, Longman, 1971 の第四部として発表。ADBとの関連は深まり、その後、昭和四九年一二月、「貿易戦略と経済開発」セミナーに参加、昭和五六年一〇月から一カ年、「ADBの新方向」プロジェクトにアドバイザーを務めた。

昭和五〇年八月。先方はジョン・クロフォード卿とピータ―・ドライデール博士、当方は大来佐武郎氏と私が中心になって、日豪経済関係共同研究が三年余にわたり続けられ、*Australia, Japan and the Western Pacific Economic Relations*（いわゆるクロフォード・大来レポート）がまとめられた。その後、日本側は「日豪調査委員会」を昭和五一年に発足させ、豪側は国立大学の中に Australia-Japan Research Centre（ドライスデール所長）を設立し、東京とキャンベラで交互に毎年合同会議を開いている。相互に多数の成果を発表してきた。こんなわけで、今日までに十三回か渡豪したことになる。

昭和四七年一―二月。ロンドンのトレードポリシイ・リサーチセンター（ハリー・ジョンソン議長、ヒュー・コーベット事務局長）主催の「非関税障壁」会議に出席。日経センターとの共同プロジェクトであった。その成果は、小島清・小宮隆太郎編『日本の非関税障壁』日本経済新聞社、一九七二年となった。同センターとの関連は続いているのであるが、その後、昭和五二年一二月、ニューデリーで開かれた「新国際経済秩序論」会議に出席。

昭和四七年七月。韓国国際関係研究所主催「サミット後の東アジア」ソウル会議に出席。これが私の第一回韓国訪問であっ

た。その後昭和四八年七月、同五五年一一月、同五八年七月と前後四回訪韓し、韓国経済のすばらしい発展に、強い印象をうけた。

昭和四九年四―五月。一九七三年一〇月にオイル・ショック発生、七一年末以来のフロート化に加え、世界経済は新しい局面に転じた。牛場（信彦）ミツションに細見卓氏らと同行し、レバノン、イタリー、スイス、ドイツ、ベルギー、フランス、イギリス、アメリカを回り、オイル・ダラー問題を調査。

昭和五〇年六月。ソ連科学アカデミーの招請により、妻と一緒に、はじめてモスコーに滞在、バルト海岸のリガにも行く。

昭和五六年三―四月。中国社会科学院世界経済研究所（罗元錚氏）の招待により、「世界経済と中国」抗州会議に妻と一緒に出席、その後、北京にて講義、座談会を行う。

昭和四七年四月。八ヶ岳美濃戸口に山荘を建つ。同四五年五月一九日に、母まさの死去に伴い、名古屋の遺産を処分したのが、財源になった。夏休中の研究と健康増進に、役立っている。

昭和四七年五月。赤松先生の雁行形態論の理論的・実証的発展をはかるべく、世界経済研究協会編『日本貿易の構造と発展』を至誠堂より発刊。

昭和四九年一二月二〇日。恩師赤松要先生逝去さる（七十八歳）。マニラでのアジ銀のセミナーから帰国した翌日であった。門下生編として、『学問遍路　赤松要先生追悼論集』を、昭和五〇年一二月に、世界経済研究協会から発行。先生の次の名句に同感を禁じえない。

老いにつゝ　ひとおのおのに　憂あれば
今宵あいみて　さけくむべしや

昭和五〇年一月。謡曲の稽古を再開、ついで仕舞も習い始む。老後の楽しみを準備するため。前年の三月七日、定年退官を直前にして急逝された村松祐次先生の推薦によるが、そのゼミテンたる津村礼二郎師が、小金井に道場を開いていることを知ったからである。

七　日本型海外直接投資論

私のもう一つの、世界の学界への貢献は、日本型海外直接投資論の展開である。海外直接投資論とか多国籍企業論は、ミクロ企業行動の国際ビジネス・アプローチが支配している。これに対し、比較生産費とその変動を中心に据えた、国際分業と海外直接投資の双方を、同じ線上で取扱いうる、マクロ経済的アプローチでなければならないというのが、私の日本型海外直接投資論のねらいである。太平洋経済圏作りとの関連で言えば、私の初期の提案は経済統合の利益を基礎におくものであったが、最近では、日本型海外直接投資を賢明に活用して、開発途上国の追いつき工業化と、先進国の構造調整を調和的に促進し、もって太平洋地域のダイナミックな貿易拡大をはかるべしというにある。

昭和四五年八月。シドニーでの第三回太平洋貿易開発会議。テーマが「アジア太平洋地域の海外直接投資」であった。ハリー・ジョンソンが基調報告をやり、キンドルバーガー、ハイマ

ー、サファリアン、ブラッシュ、小宮隆太郎、浜田宏一など、この問題の権威が報告し、討論を重ねた。ここで私は、海外直接投資問題に対し、漸く開眼したのであった。

昭和四五年九―一〇月。チリ・サンチャゴ大学主催の「太平洋会議」に出席。アンデス・パクトなどラ米の「新形態の海外直接投資」要求に、接した。

昭和四七年九月。ブルッキングス研究所主催「通商政策」セミナーに出席のため（小宮氏も）バーミュダに行き、帰途、ワシントンでの世銀主催「一九七〇年の開発途上国工業化と貿易政策」会議でペーパーを読む。

昭和四八年三―四月。第二回ブルッキングス研究所セミナーに出席、テームズ河畔のメンドンヘッドに行く。この時のペーパーが、A Macroeconomic Theory of Foreign Direct Investment であった。これが多大の反響を生むことになった。妻と同行していたので、帰途、ミラノでの世界貿易政策会議に出席、ドイツ、ベルギー、ポルトガル、スペインを訪問した。

昭和四八年六月。『世界貿易と多国籍企業』を創文社から公刊。過去数カ年の理論的研究の集大成であるが、海外直接投資論が含められた。

昭和五二年二月。『海外直接投資論』をダイヤモンド社より出版。後に *Direct Foreign Investment: A Japanese Model of Multinational Business Operations*, Croom Helm, London, 1978 (Tuttle, Tokyo から普及版も) として公刊した。私のこれまでの最高の傑作であると思う。この英語版を、私の還暦記念として、学界とゼミテンに贈った。エコノミック・ジャーナルをはじめ多数のコメントを得た。これに答える一章を追加して、『多国籍企業の直接投資』を、昭和五六年五月にダイヤモンド社から出した。

昭和五二年四月。国連に多国籍企業委員会が設けられ「行動規範」づくりが始められた。世界から一五名というエキスパート・アドバイザーの一員に選ばれた。この結果、昭和五七年まで、ニューヨークに六回のほかウイーンとマニラに出かけた。

昭和五三年一〇月―五七年一〇月。国際経済学会理事長。

昭和五六年九月。私の還暦は、昭和五五年五月二二日であるが、わが弟子・学友が、山沢逸平・池間誠編『資源貿易の経済学』(文真堂) なる還暦記念論文集を贈ってくれた。感懐ひとしおなるものがある。弟子どもの成長が頼もしい。

昭和五九年二月。小島清・小沢輝智共著『総合商社の挑戦――経済開発のマーチャント――』が、産業能率大学出版部から公刊された。この英・仏語版がOECDから出される手はずになっている。不思議なことに、東京外語出のコロラド州立大学小沢輝智教授が、私の日本型海外直接投資論を支持していてくれる。来日の折しばしば相談したり、ESCAPの投資問題の会議に（昭和五四年一二月）一緒に出かけたりした。OECDでの「新形態海外直接投資」研究に、彼が中心になり、私と共同で、日本の総合商社が新形態投資の担い手であったという報告を提出した。その日本語版である。

小沢教授は、海外直接投資に関する実証分析は、データ不足

にかかわらず、何とかやれるという、大きな刺激を私に与えてくれた。理論的にのみ示した、日・米海外直接投資の相違点を検証するという作業を、昭和五二年以来関係している日本輸出入銀行海外投資研究所の支援を得てやり始めた。あと一年位の間に同研究所の「調査資料」として出版すべく、努力中である。

昭和五九年二月一〇日。「日本型海外直接投資と雁行形態論」なるテーマの下に、退官記念講義を行う。私の日本型海外直接投資論が、赤松要先生の雁行形態論の延長であり、一橋大学国際経済学の伝統の上に成立していることを強調した。と同時に、動態的国際分業論の樹立に向って、仕残した多くの課題があることを告白した。講義後、多数の学内外の学者と、小島会（ゼミ）メンバーの参集を得て、盛大なパーティを開いてもらった。一世の感慨であった。なお、一橋大学研究年報　経済学研究25への拙稿「貿易・海外直接投資の統合理論」が記念講義の中身である。その抜刷を一橋大学退官記念論文として、学界と小島会メンバーに贈った。

昭和五九年四月一日。停年制により一橋大学を退職。一橋大学名誉教授の称号を授与される。無上の光栄である。

昭和五九年四月。国際基督教大学（ＩＣＵ）教授に転ず。